

台湾視察報告書

沖縄経済同友会

2023年2月

主催：国際委員会

目 次

I. 視察団名簿.....	1
II. 視察日程表《2023年2月1日（水）～4日（土）》.....	2
III. 視察総括.....	3
東川平 信雄 国際委員長（株おきぎん経済研究所 代表取締役社長）	
IV. 財国防安全研究院 視察.....	7
木村 政昌（株みらいおきなわ 代表取締役常務）	
V. 日本台湾交流協会 視察.....	9
前田 貴子（株ゆがふホールディングス 代表取締役社長）	
VI. 圓山大飯店と地下シェルター 視察.....	11
上運天 清（株りゅうせきフロンティア 代表取締役社長）	
VII. TSMC 台積創新館 視察.....	14
臼井 隆秀（インタラクティブ(株) 代表取締役社長）	
VIII. 鳥山頭ダム・八田與一記念館 視察.....	18
久貝 博康（沖縄プラント工業(株) 代表取締役社長）	
IX. 高雄港湾地区 視察.....	21
仲宗根 齊（株沖電工 代表取締役社長）	

I. 視察団名簿

No.	当会役職	氏名	会社名	役職
1	代表幹事	淵辺 美紀	(株)ジェイシーシー	代表取締役会長
2	代表幹事	川上 康	(株)琉球銀行	代表取締役頭取
3	副代表幹事	東 良和	沖縄ツーリスト(株)	代表取締役 CEO
4	副代表幹事	當銘 春夫	(株)りゅうせき	代表取締役社長
5	国際委員長	東川平 信雄	(株)おきぎん経済研究所	代表取締役社長
6	組織・拡大交流委員長	小林 文彦	川崎重工業(株)	沖縄支社長
7	観光委員長	前田 貴子	(株)ゆがふホールディングス	代表取締役社長
8	情報通信委員長	上運天 清	(株)りゅうせきフロントライン	代表取締役社長
9	環境・エネルギー委員長	久貝 博康	沖縄プラント工業(株)	代表取締役社長
10	SDGs 委員長	栩野 浩	沖縄ツーリスト(株)	執行役員 SDGs 特命部長
11	常任幹事	喜久里 忍	琉球セメント(株)	代表取締役社長
12	常任幹事	仲宗根 斉	(株)沖電工	代表取締役社長
13	会員	白井 隆秀	インタラクティブ(株)	代表取締役社長
14	会員	木村 政昌	(株)みらいおきなわ	代表取締役常務
15	準会員	高野 衛	沖縄日下部産業(株)	営業部長
16	準会員	高橋 忠大	三井物産(株)	那覇支店長代理
17	会員企業	仲村 千博	(株)沖縄ダイケン	専務取締役
18	事務局	竹越 康一郎	沖縄経済同友会	事務局長
19	事務局	鈴木 理恵	沖縄経済同友会	事務局研究員
20	事務局	佐久本 順子	沖縄経済同友会	事務局員

II. 視察日程表 2023年2月1日(水)～4日(土)

NO	月日	時間	行程	食事	宿泊地
一日目	2023年 2/1 (水)	10:50 11:10 12:50 13:30 14:30 16:00 17:30 20:00	那覇空港国際線3階出発ロビー集合～搭乗手続き～ 特別待合室Aにて結団式～出国審査～ 那覇発 スターラックス(JX)871便にて台湾・台北へ 桃園国際空港 到着～入国審査～税関審査～ 貸切バスにて出発(途中、●台北市内車窓見学予定) 視察(1) (財)国防安全研究院(安全保障「国民保護」等について) ★「雲南人和園」にて「雲南料理」の夕食 ホテル到着～チェックイン～	機内食 夕食	時差 -1 台北
二日目	2/2 (木)	06:30 08:30 09:00 10:30 11:30 14:30 17:00 18:30 21:00	ホテルにて朝食(06:30～可)/ホテルロビー08:20集合 貸切バスにて台北・新竹視察へ 視察(2) 日本台湾交流協会 訪問(台湾の経済事情について) 視察(3) 台北市内 視察(LRT 又は その他) ★台北市内レストランにて台湾日本関係協会関係者との昼食会 視察(4) TSMC 台積創新館(創業と発展の歴史を学びます) 視察(5) 台北迪化街 散策(ディーホアジェ/昔からある問屋街) ★「欣葉本店」にて東海ロータリークラブとの夕食会 ホテル到着	朝食 昼食 夕食	台北
三日目	2/3 (金)	06:30 07:45 08:21 10:00 10:50 13:15 15:00 16:10 16:55 19:00 21:00	ホテルにて朝食(06:30～可)/ホテルロビー07:35集合 貸切バスにて台北駅へ 台北駅発 台湾新幹線 613 便にて嘉義駅へ(09:48 着) 貸切バスにて台南・高雄視察へ 視察(6) 烏山頭ダム(10:50～)・八田與一記念館(11:40～) ★「港都茶樓」にて「飲茶料理」の昼食 視察(7) 高雄港湾地区 視察(台湾第2の都市・台湾一の商業港) 貸切バスにて高雄駅へ 高雄駅発 台湾新幹線 144 便にて台北駅へ(18:29 着) ★「天厨菜館」にて「北京料理」の夕食 ホテル到着	朝食 昼食 夕食	台北
四日目	2/4 (土)	06:20 07:20 09:30 11:50	専用車両にて桃園国際空港へ(BOX 軽食) 桃園国際空港 到着～解団式～搭乗手続き～出国審査～ 台湾発 スターラックス(JX)870 便にて沖縄・那覇へ 那覇国際空港 到着～入国審査～税関審査～	軽食 機内食	***

※上記の時間は目安であり、航空スケジュールの変更や現地の交通状況などに伴い、変動となる場合がございます。

III. 視察総括

【報告者：東川平 信雄 国際委員長 (㈱おきぎん経済研究所 代表取締役社長)】

私たち沖縄経済同友会瀨辺美紀、川上康両代表幹事を含む視察団 20 名は、2023 年 2 月 1 日から 2023 年 2 月 4 日までの 3 泊 4 日間の日程で、海外ビジネスの可能性について調査・研究を目的に先進事例の調査研究の一環として本島を中心として 77 の付属島嶼からなる総面積 36,197k m²、人口 2,318 万人（2022 年統計）の台湾の各事情を視察しました。

主な視察先として、(1) 財国防安全研究院にて安全保障（国民保護）等について視察、(2) 日本台湾交流協会へ台湾経済事情について訪問、(3) TSMC 体積創新館にて創業と発展の歴史を学び、(4) 台湾で最も尊敬される日本人八田與一の記念館及び建設した烏山頭ダムを視察、(5) 高雄港湾地区視察など台北から台南までの視察・調査を行いました。

視察初日は、那覇空港発、桃園国際空港着の「所要時間 1 時間 20 分（時差 1 時間）」の移動となりました。桃園国際空港到着後、入国審査・税関審査を経てコロナ抗原検査キットを受け取り入境しました。その後、バスにて移動し最初の視察先である財国防安全研究院を訪問しました。

台湾の防衛省にあたる国防部が設置した機関であり、国家安全会議直轄で 2018 年 5 月に設立された台北を拠点とする台湾のシンクタンクです。使命は、相互理解を強化し、グローバル及び台湾の防衛、安全保障共同体における共通の利益を促進することにより、台湾の民主主義と繁栄を保護することです。財国防安全研究院の訪問にあたり林成蔚執行長、他 2 名の政策分析員、副研究員同席にて意見交換を行うことができました。意見交換の場では、多くの質問に対し丁寧に答えていただき現状の台湾防衛、中国に対する心境など大変勉強になりました。



那覇空港にて



財国防安全研究院

視察 2 日目は、台湾の経済事情を学ぶため「公益財団法人日本台湾交流協会」を訪問しました。日本台湾交流協会は、東京本部と台北事務所、高雄事務所から成り立っており、日本政府との緊密な連携の下、外交関係の無い台湾との間の実務関係を処理するための各種業務を行っています。台北事務所では、邦人保護、査証発給、経済・文化交流、台湾側各界との調整及び各種調査事業等、日本の在外公館が行う業務に類する事業を台湾にて展開しているところです。視察では、台湾の経済動向や今後の日本と台湾の協力関係等の質疑応答が行われ、台北事務所の皆さんとの活発な意見交換が行われました。

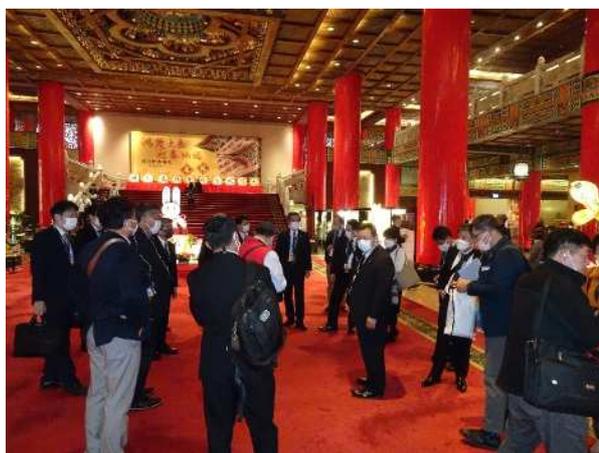
その後、台湾台北市に位置する小高い丘の上に建つ台湾を代表する格式あるホテル圓山大飯店を訪問しました。1952 年に蒋介石夫人である宋美齡氏が建てた、台湾第 1 号の 5 つ星ホテルです。また、剣

潭公園に隣接し、台湾神宮の跡地に建設されており、台北のランドマークになっているホテルです。館内は、赤いじゅうたんが敷き詰められこの雰囲気圧倒されました。そのホテルの一角には密道（秘密の地下道）があり、シェルター（防空壕）機能を持つ非常用避難ルートとして隣接する劍潭公園までつながり、全長 85m のトンネルは滑り台と 74 段の階段で作られていました。

見学後、台湾日本関係協会の范副秘書長、他 3 名と同席にて昼食会を開きました。食事をとりながら沖縄と台湾の関係強化などの意見交換を行い相互の親睦を深め有意義な懇親会となりました。



日本台湾交流協会



圓山大飯店



シェルター



台湾日本関係協会

その後、台北から南西へ約 60 km の台湾北西部に位置し人口約 45 万人を擁する中都市新竹へバスにて移動しました。新竹は、台湾の基幹産業であるハイテク産業が盛んな地域で郊外には IT 関連企業が集中する世界的にも有名な工業団地、「新竹サイエンスパーク」があり、「台湾のシリコンバレー」と呼ばれています。視察先は、その新竹にある TSMC 台積創新館を訪問しました。台積創新館は、台湾積体電路製造股份有限公司（TSMC）本社に付設されている博物館で、TSMC 創業と発展の歴史と半導体についての学びを深めることができる施設です。TSMC は、世界最大の半導体受託製造企業（ファウンドリ）であり世界最高水準の製造技術力を持つ企業で、2024 年には日本の熊本県に工場を建設し生産を開始する予定です。今後の日台関係にも重要な役割を果たす企業であり大変興味深い視察でした。

その後、台湾随一の問屋街「迪化街」を散策しました。迪化街は漢方薬やからすみなどの乾物、布類などの問屋が集まる古い街並みとおしゃれなショップが混在した賑やかな通りでお土産探しにもってこいのスポットでした。

散策後、「台湾と日本の架け橋」を原点に活動している台北東海ロータリークラブの皆さんと夕食会を開催しました。今回は、沖縄経済同友会が首里城復興及びSDGs支援に向けた取り組みとして作成した首里城バッチ購入に協力していただいたこともあり感謝の意を込めての交流会となりました。交流会後、短い時間でしたが台北市で最大規模を誇るナイトマーケットの一つ士林夜市を散策しました。夜市では定番グルメの臭豆腐、牡蠣オムレット（蚵仔煎）など食べ歩き観光を楽しむことができました。



TSMC



迪化街



台北東海ロータリークラブとの夕食会



士林夜市

視察3日目は、台北駅発の台湾新幹線で嘉義駅まで行きバスへ乗り換え視察先である烏山頭ダムへ移動しました。烏山頭ダムは、1920年に着工し10年の歳月をかけて1930年に完成した貯水量1億5000万トンダムです。総延長1万6000キロメートルの送水・排水路をもつ嘉南大圳の水利工事の一つであり灌漑整備によりダム周辺は台湾最大の穀倉地帯が広がっています。また、建設を監督した水利技術者の八田與一の名に因んで八田ダムの名でも知られています。烏山頭ダムを中心に公園として整備され八田與一の銅像や墓碑、八田與一記念館などがあり彼の残した業績に関する資料、遺品や在りし頃の写真、ダム建設時の様子などの文献を見ることができました。

その後、バスにて台湾の南西部に位置する総人口2,724,134人（2022年5月）の台湾随一の規模を誇る台湾第三の都市高雄市に移動し台湾最大の港である高雄港湾地区を視察しました。視察は、視察船で

船内外にて港湾についての説明を受けながらの視察でした。高雄港のコンテナ取扱貨物量は、986.4（単位：万 TEU）2021 年（速報値）世界第 17 位の貨物量を取り扱っています。沖縄県コンテナ取扱貨物量は、59.3（単位：万 TEU）2021 年（速報値）で外貿コンテナ 8 万 TEU、内貿コンテナ 51.3 万 TEU となっており今後の県内物流へ取り組みを改めて考えさせられました。

国際委員会では、活動方針として自立型県経済の構築を図るべく地理的優位性を活かした国際物流拠点の形成や臨空・臨港型産業の集積に関する調査研究に取り組んでいるところであり今回の港湾視察は、大変勉強になる視察でした。



鳥山頭ダム



高雄港

視察 4 日目は、視察最終日となり帰国のため移動日となりました。朝早く桃園国際空港へバスにて移動し桃園国際空港発、那覇空港着をもって全ての日程を無事終了することができました。今回も沖縄経済同友会短期海外視察（台湾）は、基地・安全保障委員会との共催にての開催となり内容充実した視察となりました。

台湾を北から南まで広範囲にわたる視察となりましたが、全ての視察先での学びは実り多く、大変有意義な視察を行うことができました。

最後に短期海外視察（台湾）にあたって、ご協力いただきました各視察先の皆様並びにご参加くださいました皆様へ深く感謝を申し上げまして全体総括とさせていただきます。



以上

IV. (財)国防安全研究院 視察

【報告者：木村 政昌（株みらいおきなわ 代表取締役常務）】

◆訪問日：2023年2月1日（水）16:00～17:00

◆訪問先：財団法人台湾国防安全研究院

◆対応者：執行長 林成蔚、副研究員 王尊彦、政策分析員 陳彦廷（全員日本語可）

◆内 容：

台湾「国防安全研究院」は、台湾の防衛省にあたる国防部が設置した機関であり、国家安全会議（National Security Council NSC）で2018年5月に設立されたものである。

対応者は執行長（No.2）林成蔚氏。常葉大学法学部教授、北海道大学公共政策法学部教授、駐日経済文化代表處代表辦公室主任、国家安全會議諮問委員などの職位を経て、現職に至る。

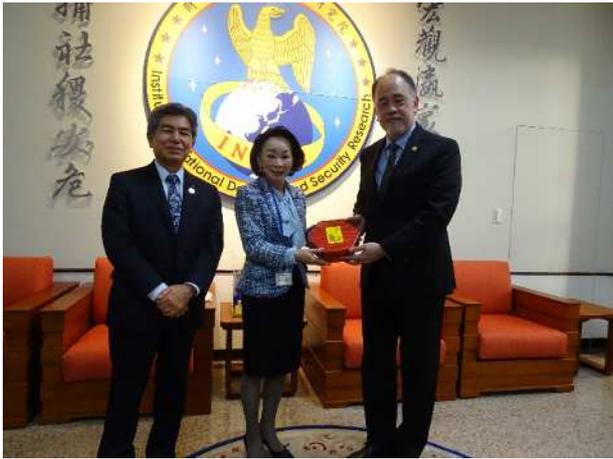
設立の経緯として、台湾国防部（日本の防衛省に相当）は、戦略環境の変化および国防改革の必要性から、学者・専門家からの幅広い意見を聞き入れ、各国の重要なシンクタンクの発展プロセスを参考にし、国家レベルの戦略的なビジョンを兼ね備えた「財団法人国防安全研究院（以下、国防安全研究院）」を設立。「国防安全研究院」が国家レベルの国家安全保障のためのシンクタンクとなり、研究や交流を進め、国家安全保障、地域の安全情勢、中国共産党の政治・軍事などを含む議題に関する研究を行い、助言を与え、諸外国のシンクタンクとの交流に従事するとしている。

双方の意見交換は質疑応答形式で進められた。意見交換の場では多くの質問に対し丁寧に答えていただき、現状の台湾防衛、中国に対する心境など、大変勉強になる非常に有意義な意見交換会であった。林執行長をはじめとする国防安全研究院の皆さまにはこの場を借りて御礼を申し上げる。



双方の代表メンバー

※左より東副代表幹事、淵辺代表幹事、林執行長、川上代表幹事、當銘副代表幹事



林執行長への記念品贈呈



台湾国防安全研究院ロビーにて記念撮影①



台湾国防安全研究院ロビーにて記念撮影②

以上

V. 日本台湾交流協会 視察

【報告者：前田 貴子（株ゆがふホールディングス 代表取締役社長）】

「公益財団法人日本台湾交流協会」は、1972年の日中国交正常化に伴い、日本と台湾の間の実務レベルでの交流関係を維持するため、台湾在留邦人及び邦人旅行者の入域、滞在、子女教育及び日台間の学術・文化交流等につき各種の便宜を図ること、我が国と台湾との貿易、経済、技術交流等の諸関係を円滑に遂行することを目的として、外務省・通商産業省(当時)の認可を受け財団法人として設立された。

同協会は、東京本部と台北事務所、高雄事務所から成り立っており、日本国政府との緊密な連携の下、外交関係の無い台湾との間の実務関係を処理するための各種業務を行う。台北事務所及び高雄事務所では、邦人保護、査証発給、経済・文化交流、台湾側各界との調整及び各種調査事業等、我が国の在外公館が行う業務に類する事業を台湾にて展開している。

視察では、同協会副代表の服部崇様、経済部の有田様、江田様、邱様がブリーフィングと質疑応答にご対応いただいた。

アフターコロナで同協会には連日、日本全国の自治体から「食品」と「観光」の売り込みを主目的とした来訪者が相次いでいるとのこと。我が沖縄県も、従来以上の付加価値を提供していかなければならないと感じた。

<台湾経済概況>

- ・2020年の出生率は日本1.38%に対して台湾は1.07%。今後、台湾における高齢化率は、日本の2倍のスピードで進み、2060年には日本の高齢化率に追いつく見込み。
- ・GDP成長率の推移と当面の見通しは、2022年下半期にかけて各国のインフレと利上げ、在庫調整、中国大陸のコロナ感染状況の悪化などにより消費と生産活動が低迷し、輸出の伸びが鈍化。
- ・主要貿易相手国は、台湾にとって日本は、中、米に次ぐ3番目。(対日本の輸出：292億米ドル 輸入：561億米ドル 貿易収支：△269億米ドル)
- ・日台間の貿易品目の特徴として、輸出・輸入ともに機械及び電機設備の占める割合が大きい(輸出：約62%、輸入：約47%)。また、半導体等が含まれる電子部品のシェアが大きい。(輸出：約39%、輸入：約24%)
- ・日台間の投資も、製造・エネルギー関連や不動産・サービス関連、飲食関連等、幅広く活発に行われている。2021年のTSMCによる日本での新会社設立(約2,444億円)には、日本国内でも大きな期待が寄せられている。
- ・日本から台湾への農林水産物、食品輸出(2021年)額は1,45億円で前年比+26.9%、主な品目は1位がりんご、2位アルコール飲料、3位ホタテ貝であった。
- ・輸入規制措置の緩和・・・2022年2月21日、日本の5県(福島、茨城、栃木、群馬、千葉)からの食品の輸入措置規制緩和を決定。きのこ類や野生鳥獣肉を除き、放射性物質検査報告書及び産地証明書の添付を条件に輸出が可能となる。

<台湾の経済政策>

- ・「5+2」産業発展計画の育成を基盤とした、台湾が強みを持つ分野の重点産業を「6大核心戦略産業」と位置付け、台湾を今後の世界経済における主要な動力源とする。(情報通信、戦略的備蓄、サイバーセキュリティ、バイオ・医療、防衛、グリーンエネルギー)
- ・経済発展のための新モデル 2.0 計画—台湾の 20 年度後、30 年後の経済発展の基盤を担う「四大中心」。(ハイエンド製造拠点、半導体先端製造プロセス拠点、ハイテク R&D 拠点、グリーンエネルギー開発拠点)
- ・スマート国家プラン (DIGI+) —2030 年までにイノベティブで分断のない持続可能なスマート国家を実現する (デジタル基盤、デジタルイノベーション、デジタルガバナンス、デジタル包摂)
 - ・前贈基礎建設計画—将来を見据えたインフラ計画 2.0。景気刺激及び産業転換加速のため、行政院は 8 年間で 8,825 億元の予算を投入し、1 兆 7,777 億元の民間投資を呼び込み、約 4~5 万人の雇用創出、新興産業を発展させるインフラ計画を発表 (鉄道建設、水環境建設、デジタル建設、グリーンエネルギー建設、都市・地方建設)
- ・新南向政策—2016 年 8 月、蔡総統は「対外経貿戦略会談」を招集、「新南向政策」政策綱領を策定。アジアとの各種協力強化により台湾の新たな発展をはかるための経済貿易戦略文書で対象国・地域は ASEAN、南アジア、オーストラリア、ニュージーランド計 18 国。

<台湾市場の特徴 (消費市場として) >

- ・親日的
- ・コスパ重視、消費に積極的だが単なる安さ重視はしない。良い品なら適正対価は出す。
- ・新し物好き、流行性、トレンドイ、移り気
- ・質を見る目あり、西洋のモノより日本商品に親近感、信頼感
- ・日本ブランドを熟知 (他国で無名でも)
- ・食事は空間、体験も重視
- ・日本旅行リピーター多い

<台湾市場の特徴 (生産地として) >

- ・親日的
- ・電機電子産業が発達
- ・安価で良質なサプライヤー
- ・電気代、交通費などインフラコストが低水準
- ・物流機能 (港湾・高速道路) が発達
- ・労働者の質が高い割に賃金が低い。労働の定着率も大陸に比べると高め
- ・日本の企業管理に親和性がある。
- ・工業園區は行政手続きがワンストップサービス

<参考文献>

- ・公益財団法人日本台湾交流協会 H P 2023/02/09 閲覧

<https://www.koryu.or.jp/about/introduction/overview/>

- ・(公財) 日本台湾交流協会台北事務所貿易相談チーム提供資料「台湾概況 2023 年 2 月」

以 上

VI. 圓山大飯店と地下シェルター 視察

【報告者：上運天 清（㈱りゅうせきフロントライン 代表取締役社長）】

視察2日目の午前最後の視察先として、台北市を代表するランドマークでもある1952年蒋介石夫人が建てた圓山大飯店を訪問しました。前方は基隆河、後方は陽明山、東は松山、西は淡水河を一望できる14階建てで、赤い柱と金の瓦で造られた中国宮殿様式が特徴となっております。歴史的には、第二次世界大戦終戦を経て、台湾にある神社が廃止。神社の跡地にグランドホテル圓山大飯店が建てられ、1967年にはアメリカの「Fortune」誌において世界10大ホテルに選定されております。現在に至るまで各国元首、使節、政府要人、著名人など2,000名以上を招待し、過去にはアメリカ合衆国のアイゼンハワー大統領、タイのプミポン国王、韓国の朴正熙大統領、日本の佐藤栄作首相、シンガポールのリー・クアンユー首相なども宿泊されています。様々な著名人が訪れる大変歴史のある5つ星ホテルであり、台北を代表するホテルでもあります。施設としては、500の客室、4軒のレストラン、及び大型宴会ホール、見どころとしてロビーにある多くの美術品や工芸品、密道（地下シェルター）があります。

視察当日は春節（旧正月）期間で正面入口には沢山のお供え物ありとても華やかな状況でした。館内に入ると専属ガイドによる工芸品等の案内がありました。まず、最初にエントランスホールの中央には梅の花を表した天井があり、梅の中央には五匹の龍が一つの龍玉を取り巻き、周囲に23匹の龍、16羽の鳳凰がいて、中央の5匹の龍は「五福臨門」を表し、「長寿（長生き）、富貴（財と地位）、健寧（健康と平安）、好徳（陰徳を積む）、善終（臨終の時に心残りが無い）」ことを表しているそうです。次に、レッドカーペットが引かれた先には、「周公興禮作樂」の堂々たる画廊が飾られており、紀元前1110年、国の反乱を制し、官制を定めた様子が描かれています。階段を上った先には、圓山大飯店の歴史を知ることができるVIP宿泊者等の写真が飾られていました。そして、特に目を引いたのが「百年金龍」です。この作品は、金色の龍が舞い上がっている様子が表現されており、非常に大きく、圧倒的な存在感がありました。金運UPのパワースポットとして、人気のある場所のようです。見るものを圧倒するその魅力に、多くの日本人がお参りにくるそうです。



正面入口



エントランスホール中央



ガイドの説明を聞く



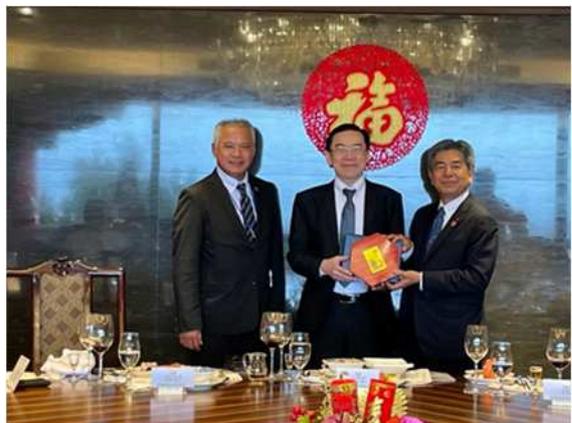
百年金龍

最後に案内されたのが、密道（地下シェルター）です。密道は東側・西側に各1本ずつあり、東側の北安公園に通じるものは全長67m、西側の劍潭公園に通じるものは全長85mあるとの事です。今回は西側を視察する事が出来ました。密道はホテルの地下に位置しており、入口はロビーからエレベーターで下りたところにあります。長さは約200メートル、最大で200人が避難することができるとの事です。密道内は洞窟のようですが、照明でとても明るくなっています。床や壁は石でできており、天井はアーチ型の石造りです。また、トンネル内にはすべり台らしきものがあり、物資を運ぶ時に利用するとの事でした。この密道は、かつての国共内戦時に政治家や軍人が利用した秘密の通路であり、視察は出来ませんでしたでしたが、秘密の部屋も残されているようです。行きは下り階段で足元に気を付けながらスイスイ行きましたが、帰りは来た道を引き返すとの事で、かなり急な上り階段をゼイゼイしながら入口に辿り着きました。



次に、昼食との事で見晴らしが良い「円苑レストラン」に案内されました。そこには、30名程度が着座できる大きな円卓テーブルがあり、台湾日本関係協会の范 振國 副秘書長一行と台湾におけるコロナ禍の影響や経済状況、中国による台湾有事関連、沖縄との交流の歴史等、情報交換を行いながら昼食

を通して懇親を深める事が出来ました。范副秘書長一行には、忙しい中ご対応頂き、この場を借りてお礼を申し上げます。



以上

VII. TSMC 台積創新館 視察

【報告者：白井 隆秀（インタラクティブ㈱ 代表取締役社長）】

台湾視察 2 日目、台北から 1 時間強のバス移動を経て、新竹市にある TSMC 台積創新館（TSMC ミュージアム）を訪問した。TSMC 台積創新館ではミュージアムのスタッフの方にご案内頂き、TSMC の創業と発展の歴史、半導体やテクノロジーの進歩、創業者モリス・チャンの功績や哲学について学んだ。



TSMC 台積創新館は 2016 年 12 月に開館したミュージアムで大きく 3 つのギャラリーに分かれている。

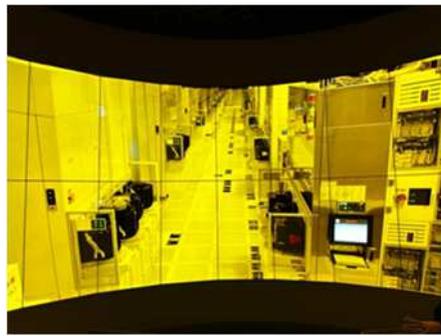
ギャラリー1：イノベーションの世界

集積回路（IC）の絶え間ない革新により、IC が日常生活でどのように普及してきたかを展示していた。各年代の IC が展示されており見た目は大きく変わらないものの「ムーアの法則」で知られるように倍々で集積率が高まり、現在では 100 億を超えるトランジスタを乗せているチップも珍しくない。展示により IC の進化によって PC の処理速度がどう変化したか、カメラの解像度がどう変化したか等を体感することができた。



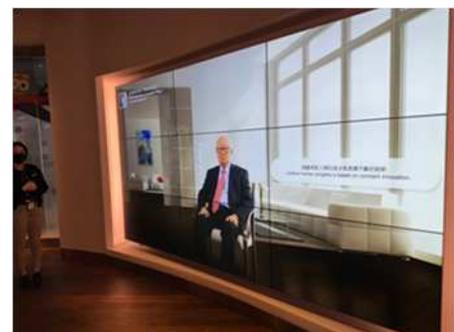
ギャラリー2：イノベーションを解き放つ

TSMC が生み出した世界初の IC ファウンドリビジネスモデルが、世界の IC 業界でイノベーションをどのように解き放ってきたかを展示していた。創業時のメモ書きから、会社のミッション、これまでの歴史、現在の工場の映像等、多くの貴重な情報に触れることができた。大きく展示されていた TSMC のミッションは「私たちの使命は、今後何年にもわたって、グローバルなロジック IC 業界の信頼できるテクノロジーと容量のプロバイダーになることです。」と記されている。



ギャラリー3：TSMC 創設者、モリス・チャン博士

TSMC の創設者であるモリス・チャン (Morris Chang/張忠謀) 博士の生涯の記録を展示していた。彼の子供時代と教育、世界の IC 業界でのキャリア、名誉と業績、家族生活、個人的な興味などを学ぶことができた。最後の展示ではバーチャル上でのモリス・チャン博士と川上代表幹事との対話の実現した。



人気の VR 技術を使った展示コーナー

施設でとても人気のコンテンツとなっている、VR 技術を使った展示コーナーも一同で体感することができた。VR ゴーグルを装着し、稼働するシートに乗り込み、5分ほどの未来都市での生活を体感した。



TSMC 台積創新館の見学を通じて私が学んだこと、感じたことを以下にまとめたい。

TSMC について

TSMC は 1987 年に世界で初めての「半導体専門のファウンドリ」として創業した。当時はインテルやテキサスインスツルメンツ等、半導体の設計と製造が一体となっているのが当たり前で、「設計はやらずに製造に特化し、顧客の設計したチップを受託製造する半導体メーカー」という発想には否定的な意見が多かった。創業者のモリス・チャンはこのアイデアを 70 年代に思いつき温めていたが、TSMC を創立できた背景には台湾政府の強力な支援があった。台湾政府も TSMC の可能性を信じ、資金調達への支援や手厚い税制優遇を重ね、その甲斐もあり順調に成長を遂げていった。1990 年代の「インターネット黎明期」、2000 年代の「パソコンと 3G の時代」、2010 年代の「スマホと 4G の時代」と現在の「あらゆるモノがインターネットにつながる 5G の時代」とデジタル社会が進展するにつれて、TSMC の存在価値は高まっていった。もっと言うと TSMC が「半導体を自社で製造できなくても、革新的な製品を世に出せる世界」を創ったことで、世界のイノベーションを引き起こすことができたともいえる。

現在では世界で 6.5 万人以上の従業員を抱え、2021 年度の売上は 568 億米ドル、2023 年 1 月末次点の時価総額は 4321 億ドルで、台湾で 1 位、世界で 13 位というエクセレント・カンパニーとなっている。

創業者モリス・チャンについて

モリス・チャン（張忠謀）は現在 91 歳である。略歴は以下のようになっている。

1931 年(0 歳):中国の浙江省寧波市に生まれる。

1948 年(17 歳):香港に移住する（国共内戦中で中華人民共和国が成立する 1 年前）

1949 年(18 歳):米国に渡りハーバード大学に入学

1950 年(19 歳):マサチューセッツ工科大学(MIT)に編入

1955 年(24 歳):学士号修士号取得した後、Ph.D.を取得せずに MIT を卒業

1955 年(24 歳):シルバニア・セミコンダクタに就職する

1958 年(27 歳):当時急成長していたテキサス・インスツルメンツ(TI)に転職

1964 年(33 歳):スタンフォード大学で電気工学の Ph.D.を取得

1983年(52歳):TIでグループ・ヴァイス・プレジデントまで昇進した後退任
1983年(52歳):ジェネラル・インストゥルメントの社長兼CEOに就任
1985年(54歳):ジェネラル・インストゥルメントの社長兼CEOを退任
1985年(54歳):孫運璿に招聘されて工業技術研究院(ITRI)の董事長兼院長に就任
1987年(56歳):TSMCを設立
2005年(74歳):TSMCのCEOの地位を蔡力行に譲る
2009年(78歳):TSMCのCEOに復帰
2018年(87歳):CEOの退任を発表し、CEOに魏哲家、会長に劉德音が就任

(所感)

TSMCの創業と成長のストーリーは「まだパソコンさえ普及していない時代に、現在のあらゆるものがインターネットにつながる世界を予見し、そこに官民一体となって取り組んできた国家の成功ストーリー」とも捉えられる。20年後、30年後を見通す先見の明と、戦略を信じて投資をする勇氣、そして愚直に実行し成功を引き寄せた人々の氣骨に大きな感動を覚えた。

いつの時代にも未来はあるわけだから、沖縄にも日本にも可能性は無限にあるし、挑戦する氣運をつくっていきたいと感じた。

また創業者であるモリス・チャンの生涯を見ると、1人の人間の力は驚くべき可能性を秘めているということ。そして何歳からでも挑戦できるし、力を発揮できるということを証明してくれたと思う。人生100年時代を生き抜くために、経営者として我々がどう行動していくべきか、大きな示唆を与えてくれている。

最後に TSMC 台積創新館のオブジェに記されたモリス・チャンの言葉で締めくりたい。



「難局を越えて 輝く未来へ」

以上

VIII. 烏山頭ダム・八田與一記念館 視察

【報告者：久貝 博康（沖縄プラント工業㈱ 代表取締役社長）】

台湾は、日清戦争後の1895年～1945年までの50年間日本統治下に置かれ、日本政府は台湾のインフラ整備を行ったがその中の1つに治水工事があり、多くのダムが建設された。今回、台南市にある台湾最大規模の農水施設である烏山頭ダムを3日目に視察した。

〈烏山頭ダム〉

1920年に着工して10年の歳月をかけて1930年に完成したダムで完成当時は東洋一の規模を誇ったダムであった。

嘉南平野の農業灌漑を主目的として建設され、この平野は作物がほとんどとれない地域であったがダム完成後に台湾最大の穀倉地帯となり、南台湾の農業発展に大きく貢献した。

このダムを建てた日本人技術者の八田與一氏はその功績から多くの台湾の人々に感謝され、台湾の中学校の歴史教科書にも載るほど最も尊敬される日本人として知られている。

ここで、八田與一の人物像を紹介する。

- ・1886年（明治19年）石川県で生まれ、1910年東京帝国大学工学部土木科卒業後、24歳の時（1910年）に台湾総督府内務局土木課の技手として就職する。
- ・1920年、烏山頭ダムの建設に着手。建設予算の確保やアメリカに渡り最新鋭土木機械の仕入れなどに奮闘する。
- ・1922年、工事中にガス爆発事故が起こり、日本人、台湾人合わせて50余名の死者が出た。事故現場で陣頭指揮を執り、原因究明と犠牲者の遺族のお見舞いに奔走する。
- ・1923年、日本で関東大震災が起こり、工事は一時中止となり作業員の半分が解雇されることになるが、日本人より地元の台湾人を優先で残し、また、解雇された人々の再就職先を斡旋するなど地元の人々の為に尽力する。
- ・八田氏のこのような行動が地元の人々から多くの信頼、尊敬を受けることとなる。
- ・太平洋戦争中の1942年5月、フィリピンの綿作灌漑調査のため乗船中に、五島列島付近でアメリカ海軍の潜水艦の雷撃で撃沈され、亡くなった。享年56歳
- ・日本敗戦後の1945年（昭和20年）9月、妻の外代樹も夫の八田の後を追うようにして烏山頭ダムの放水口に身を投げて亡くなった。享年45歳。

〈八田與一記念公園〉

烏山頭ダムの敷地は広大な八田與一記念公園となっており、公園内には八田與一記念館、八田與一移住家屋、八田與一像、殉工碑など多くの見所がある。

記念館には、八田氏の功績等を紹介するビデオ上映や写真、資料等が展示されており、ダム建設時の様子などを知ることができる。



八田與一記念館内の様子

また、敷地内には、八田與一の銅像と夫婦の墓もあり、銅像はダム完成後の1931年に彼を慕う近隣住民により建てられた。第二次世界大戦下には、金属供出を求められた際、住民はこの銅像を隠し、また、日本が敗戦した後に中国国民党政府が台湾に入ってきた時に日本人の銅像などを撤去する命令を出したが、住民は拒否し、銅像は密かに隠され保存されていたとの事。1981年以降ようやく政治圧力が消えたとして陽の目を見るようになり、再びダムを見下ろす元の場所に設置された。

銅像前では、現在でも八田氏の命日である5月8日には、毎年慰霊祭が開かれている。

しかし、2017年4月に台湾の親日傾向を嫌う右翼思想の持ち主より、銅像の首が切断される事件が発生した。当時の台湾市長をはじめ台湾の人々がすぐさま行動を起こし、銅像の修復を行い元の状態に復することができ、この年の5月8日の慰霊祭には、例年より100人も多い約250人が参列したとのこと。また、銅像のうしろには、1946年（昭和21年）に地元嘉南の農民たちによって建てられた八田夫妻の日本式のお墓がある。

その他、ダム建設中に亡くなった134名の方々の殉工碑があり、従業員だけでなく、事故や病気で亡くなったその家族も含めて全員の名前が、日本人・台湾人、男女の区別なく死亡順に刻まれている。当時の台湾は日本の統治下にあったが、台湾人も日本人も分け隔て無く、平等に扱っていた八田氏の姿勢が伺える。



與一銅像と八田夫婦のお墓



殉工碑

ダムは海拔 468mに位置し水力発電所があり、また、ダム建設時に資材運搬に使用された蒸気機関車なども展示されていた。



水力発電設備



建設時に使われた蒸気機関車

《視察を終えての所感》

今回、烏山頭ダムを視察し、日本人の八田與一氏のことを知ることができた。

今でも、毎年慰霊祭が行われており、これ程、台湾の人々から尊敬され、愛された日本人はいないだろうと感じた。台湾には親日派の方が多いと聞くが、これも八田與一氏など先人達の台湾に対する功績によるものが大きいと思う。

昨今、台湾有事や台湾の半導体企業 TSMC の熊本県進出など台湾に関する話題が多く、また、沖縄県とは地理的にも近く、台湾からの観光客も多くいろいろ関係が深い。今回の視察を通して、改めて台湾とのより良い関係構築の大切さを感じた。



烏山頭ダム前にて

以上

IX. 高雄港湾地区 視察

【報告者：仲宗根 齊（株沖電工 代表取締役社長）】

視察3日目の午後は、「港都茶樓」で飲茶料理の昼食を堪能後、台湾第2の都市で台湾一の商業港である高雄港湾地区の視察に向かった。高雄港湾地区へ向かう車中でガイドの許さんから高雄港湾地区について話を聞くことができた。許さんの話では、高雄港は鳥山頭ダム建設で地元台湾では有名な日本人技師の八田與一が建設にかかわったということ、当時の台湾総督府民政長官であった下村氏が当時の「打狗（ターカウ）港」と呼ばれていた港をいやしいものたたとえである「狗」の字が使われ漢字のイメージが悪いと現在の「高雄港」にしたということ、また港湾に黄色い建物があるのはバナナ倉庫の名残で当時バナナは高雄から門司、そして日本全国へ流通しており、よってバナナのたたき売りの発祥は門司であること、加えて高雄の建物には「高」の字をイメージしたものも多くあり「高雄85ビル」もその一つ、など興味深い話を聞きながら目的地高雄港へ向かった。

港に着くと台湾港務株式会社高雄港務支社の方が出迎えてくれ、挨拶も早々にクルーズ船内へ案内された。視察スケジュールで高雄港湾地区の視察は認識していたが、陸上からの視察を想像していたことから、海上から広い港湾施設を見て回れたことに視察を企画した同友会事務局および沖縄ツーリストのメンバーに感謝する。

まず海上から港湾施設を見て、ガントリークレーンの多さに圧倒された。数を尋ねると約60基のクレーンがあるとのことであった。

高雄港の歴史は、人々が開発をするまでは自然の港で、17世紀に入りオランダ東インド会社が高雄に到着し、港の開発が始まった。当時は打狗港と呼ばれ、オランダ統治時代、鄭氏政権時代、初期の清朝統治時代にだんだんと港は大きくなっていった。1858年に清はフランス・イギリス連合軍にアロー戦争で敗れ天津条約により、1864年に打狗港は正式に貿易のための港として開かれた。その後日清戦争に敗れた清政府は1895年台湾を日本に譲渡、日本統治時代の台湾総督府は打狗港を近代的な港へ開発すべく3段階で拡張する計画を立て、最初工事は1908年、2番目は1912年、3番目は第二次世界大戦で中断となった。1920年には、ガイドの許さんが話していたように港の名前が打狗港から現在の高雄港に改称された。第二次世界大戦で港は爆撃により破壊されたが、戦後中華民国政府が港の開発を再開し、現在では世界屈指の港湾となっている。

また、資料によると台湾港務株式会社は2012年に東アジアのハブ港を目指し、政府の100%出資で設立された会社で、台湾の7つの港湾を一つのグループにしてスケールメリットを活かしながら、民の視点も取り入れた港湾運営の民営化が実現されている。

クルーズ船で港湾内を視察すると、単にコンテナターミナルのみでなく、漁港や海軍基地、そして造船所に観光施設と複合的な港であることを知った。船内で港湾施設の説明をして頂いた高雄港務支社の蘇副総経理から、台湾港湾で扱う物流の半数以上をここ高雄港で取り扱っていることや整備した6つあるコンテナターミナルをバース単位で船会社へリースしておりそのリース期間は一般的には10年であるが、長いところでは20~50年のリース契約もあるとのこと。コンテナの取扱量も約1,000万TEU（20フィートコンテナ換算）と世界20位以内とのこと。ちなみに日本の2021年取扱量（速報値：空コンテナを含む）を調べてみると日本全体で2,246万TEU（外貿コンテナ1,791万TEU）、日本最大の

取扱量である東京湾で 486 万 TEU（外貿コンテナ 435 万 TEU）であり、高雄港の規模の大きさが分かる。参考までに那覇港の取扱量は 59 万 TEU（外貿コンテナ 8 万 TEU）となっている。

高雄港湾施設の視察では、沖縄も地理的には台湾同様、東南アジアのハブ港としての可能性は感じつつも、その規模に圧倒され高雄を後にした。



以上